

# 日本道德教育学会神奈川支部「道德フォーラム2023」

日時 令和5年4月22日(土) 13:00~17:00

研究テーマ

「道德科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的にかかわる道德科授業～」

## (1) 支部テーマの基調提案

提案者 小山統成研究委員 (横浜国立大学教育学部附属横浜小学校教諭)

○これまでの研究主題

- ・令和元年度から指導と評価の一体化について研究
- ・副題の変遷でさらに具体化を目指す
- ・様々な視点から授業を分析

○一人一人が主体的にかかわる道德科授業について

- ・個別最適な学び→学びを「教師の視点」から「児童の視点」へ
- ・孤立した学びにならないように

○個別最適な学びと協働的な学びを実現するために

- ・児童・生徒自身が学習を調整する主体性を育む
- ・道徳性…教師の押し付けではなく、児童の納得によって生まれていくものとする

○一人一台端末との関連

- ・ICT活用は手段であり目的ではない
- ・今年度も年4回の学習会を通して、児童生徒の主体性を育み「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現していく道德科授業の具体を考えていきたい

## 【質疑応答】

(参会者 質問①)

- ・「主体的にかかわる」→「かかわる」とは「何」に関わるのか？

(提案者 回答①)

- ・対象として教材、他者、教室を超えた地域、先人などが考えられる
- ・自分だけでは見つからない納得をこれらの「かかわりを通して」見つけていきたい

## (2) 研究実践発表

提案者 門脇 大輔 先生 (立正大学 社会福祉学部子ども教育福祉学科助教)

テーマ「道德科における個別最適な学び、協働的な学び 一体的な充実へ向けての方策」

○資料 QRコードで配付

○個別最適な学びと協働的な学びの整理

- ・すべての子どもたちの可能性を引き出すため
- ・新型コロナ臨時休業中を通して、「教師の指示がないと動けない学びが止まってしまっていた」即ち「自立した学習者が育っていなかったのでは」という課題が浮き彫りとなった

○個別最適な学び

- ・指導の差別化(その子にとって最適な学習条件・学習法方法)と学習の個性化(子ども自らが学びを成立)
- ・これらを学習者の視点から整理する

○協働的な学び

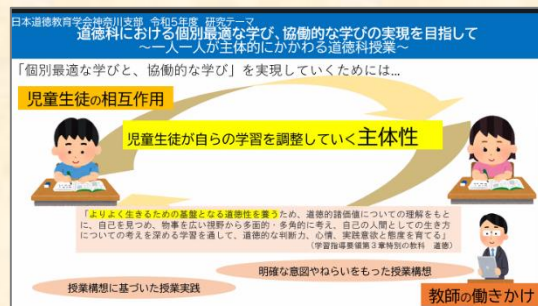
- ・道徳にフィットしている
- ・多様な他者と同じ空間に行なわれていく

※個別最適な学び、協働的な学びは往還していく、互いの成果をそれぞれに生かしていく、教育効果を高めていくものである。

道德科における個別最適な学び、  
協働的な学びの実現を目指して

～一人一人が主体的にかかわる道德科授業～

日本道德教育学会神奈川支部研究推進部



2023/04/22 日本道德教育学会神奈川支部道德フォーラム

道德科における  
個別最適な学び、協働的な学び  
一体的な充実へ向けての方策

立正大学 子ども教育福祉学科  
門脇 大輔  
kanamechiaki2@gmail.com

○道徳科における「個別最適な学び」「協働的な学び」の現状

- ・様々な文献を参考にした時、圧倒的に「個別最適な学び」について述べているものが多い
- ・一般的にどのような見解が書かれているか。

<p>藤永(2022)</p> <p>自らが自らに合った学びを自らの経験と知識・技能を通して選択する学び</p>	<p>毛内(2022)</p> <p>道徳科における「個別最適な学び」とは、子供主体の質の高い道徳授業の構築である</p>	<p>尾崎(2022)</p> <p>道徳科における個別最適な学びとは、(道徳的課題意識)を持ち、考え方を見つめる</p>
<p>清水(2022)</p> <p>子供たちが主体的に道徳的な「問い」に気づき、自ら問い続けていくことが「個別最適な学び」</p>	<p>時津(2022)</p> <p>「個別最適な学び」をどのように捉えることができるのかについて明確でない</p>	

※まだまだこの二つのとらえ方については曖昧な部分も多いことも事実である。

○個別最適な学びの学習条件

- ・子どもの文脈に依存していると考えられる。道徳において答えは子どもが持っていると考えられるため
- ・「なんのために学んでいるのか」を問う必要がある (学習方法 ICT ノートワーク 指導)

○協働的な学びにおける「関係」

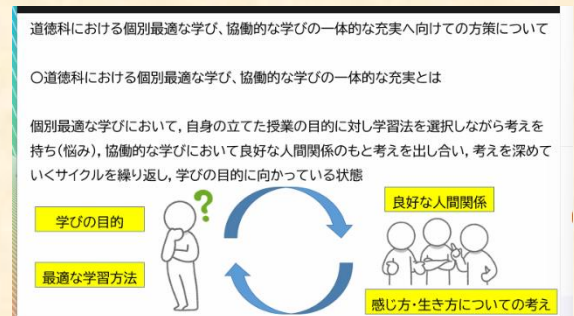
- ・状況、条件を成立させていくもの
- ・自己内対話、他者との対話で深めていく
- ・自己内対話は対話のベクトルが内側をむいている
- ・他者との対話の時は、相手の立場を考える。
- ・児童・生徒、教師の対話のベクトルを調整することが大切である

道徳科における協働的な学びとは、

“子供と子供、子供と教師の良好な人間関係のもと、他者の物事に対する感じ方や考えに関心をもったうえで、個々もつ既存の考えや、授業の中で生み出された問いに対する考えなどを出し合うことを通して、これまでの考えがさらに深まったり、新しい考えを見出した<sup>り</sup>する学び”

○対話力高める手立て

- ・道徳以外の日常生活のなかでも実践する。学校生活の中も含めて調整するように、特別活動、総合などの中で相手との対話をする機会を設ける。「君ならどうする」を常に投げかける。
- ・教師の授業展開を柔軟にする。指導過程を変更調整する。指導案に縛られてしまっはいけない。  
子どものやりたいことに授業を調整する。教師の柔軟な授業展開を考える
- ・45分間先生のルールにのっかっているような授業ではなく、子どもたちが今日はこういう授業をしてみたいということを主体的に提案できる関係性をつくっておくことがよい



【質疑応答】

(参会者 質問①)

柔軟に授業展開をするというのはよくわかる、子どもが今その話を聞きたいと言った時、全て確認する方法はあるのか。難しいのではないか。

(参会者 関連質問②)

子どもたちが道徳の授業で考えたいということを自分たちで決め選択するというのは難しいのではないか。考える場を設定するというのは、教師の設定が前提となっており、これは子どもが自己選択調整しているわけではないのではないか。「自分たちで学習を選択する」というかなり自由なこの学びは成立するものか。

(参会者 感想・質問③)

「令和の日本型学校教育の根本は何か」を考えるとということにつながると感じる。授業がうまい先生はこう考える「教師が指導すること」これを覆すということなのではないか。この辺りを現場の先生はどう思っているかを聞きたい。

(参会者 質問④)

「子どもが学びをつくる」ということはこれまでもずっと研究されてきたことである。子どもが自分で課題をつくるには課題意識や問題意識が不可欠である。そのような目的と課題の関連性についてお考えを聞きたい。

(提案者 回答①～④)

- ・「35人すべての意見を取り入れた授業が成立するか」という質問だが、そのためには人間関係が大切である。ある子が言ったことに対してみんなに投げかけてみるといった活動を行っている。ある意見を全体のものにしていくことが重要ではないか
- ・②の質問の授業の設定について、子どもがやりたいことを教師がサポートしていくイメージと捉えている。
- ・子どもたちが学びに向かっていくために今日何をするかということは大切だと感じる。自分がこのように学びたいものをもつようにしていく。35人全ての子の意見を受け止めることは難しいが指導過程を変えていくことが大切であり。子どもたちが「やってみたい、解いてみたい」というのを学習の学びの文脈に取り入れていくようにしている。
- ・目的についてだが、「先週の道徳科授業でやったこと」を聞いてみると、その内容を覚えている子と覚えていない子もいる。一方意識が高い子は、実生活道徳を結び付けることができる。
- ・理想論かもしれないが、それを具体的に落としていくことが次のフェーズだと感じている。

(参会者 質問⑤)

- ・35時間22項目を扱う道徳科において「子どもが主体的に学習していくこと」は実現していくことは可能なのか。

(参会者 回答・感想⑤)

- ・内容項目を一時間ずつ扱うのではなくまとめてといったような「パッケージ型ユニット」のような考え方が必要になってくる。

(参会者 質問・③の回答)

- ・今回の提案はこれからの道徳のスタートとして聞いていた。
- ・提案内容にあげられた二つの学びの中の学習条件や対話などについては、学習方法、学習の仕方に感じた。しかしこれらは他教科でも同様に大切なことだと思う。とりわけ道徳においての「個別最適な学び」「協働的な学び」、道徳科らしさとは何かをお聞きしたい。
- ・自分は授業の中で問いをもって人と交流したい人、一人考えたい人など、その子に合わせて考えさせる場面も作る。授業の中に自由度をつくってみることが大切。一人でじっくり考えている子は、かわいそうな子ではない。無理やり話し合う場면을教師が作らなくても良いと思っている。

(提案者 回答⑤)

- ・道徳らしさとはという質問だが、「他者と話し合える人間関係をつくる」というイメージがある。
- ・学習方法というより、「君はどう考える？」と自然発生的に生き方について考えられるような学習活動にしていきたい。
- ・子どもたちが既存の考えや、自己内の枠を外して、会話のように、生き方や考え方について話し合えるような授業を思い描いている。

(参会者 感想⑥)

- ・提案の方向性としては、自身の考え方と似ていると感じた。同時に悩んでいる部分もある。
- ・はじめの子ども感じ方、感想をどのように扱うべきか。問いの質をどこに焦点化するのか。まず、ぼつとしたイメージから問いをつくってみて、全体が考える問いができた時は授業がうまくいっている感じる。
- ・教師がつくっている問いではあるが、それは、誰かがつくった問いではない。だれかが提案した問いでも、自分の納得化に迫れるようなそんな問いをつくっていきたい。

(提案者 感想⑥)

- ・「道徳ってせーので開いてあたってページするんだよね」といった子どもいた。しかしこれでは、問いをもつ段階には至っていないと考える。
- ・子どもたちが生き方に向かっていく素地をつくりたい。
- ・誰かの問いでも、小さな自分の問いも生まれてくる。そういった意味で、「良い問い」とは余白があると感じている。

### (3)ご講話「実践家教師と編集者が語り合う道徳教育の可能性」

東洋館出版社 編集部アドバイザー 高木 聡 様

スピーカー 支部役員 梅澤 正輝 先生 田屋 裕貴 先生 元山 瑠子 先生

T 高木様 TY 多屋先生 M 元山先生 U 梅澤先生 4名による対話

T 敢えて教師ではない立場から、発言させてもらおうと「教師の授業」が成立することも大切だが、「子どもの学びが成立すればよい」という考え方もあるのではないかと感じる。子どもが教材を読んで内容項目を選ぶということも授業の可能性として考えられる。教材を選ぶことも、タブレットでやる子ども、教師と話す子もいてもよいのではないか。これは図工の「造形遊び」の感覚に近いと感じる。一つのテーマについて何をやっても良いというか、作品を近くで見たり、遠くで見たりしながら、自然と影響を受けてく、そういった感覚の道徳授業も出てくるのでは。



道徳は自由で、いろんな可能性があると思う。これから授業は定型ではない、子どもだけでなく教師も自分のやりたい授業をどのように実現するかという視点も大切になってくる。

チャット GPT の出現によって先生の存在理由を問われるのではないか。

「授業が成立すること」よりも「子どもたちの学びが成立していること」が重要であると考えた時、伴走者として子どもにかかわる教師としての個性パーソナリティが重要になってくる。

☆ここからは3人の先生への質問になります。

T: TY先生が原稿を執筆する中で、言語化してみて感じたことは何ですか。

TY: 言語化すると見つめ直す、自分がやっていること気づけていける、今後の方向性にも気付けたと感じた。

T: M先生は、この先こんな授業をしてみたいという展望はありますか。

M: 今後ICTの活用もしてみたいという気持ちや、先生方の実践を読ませていただいて気づけたこともあった。何となくやってきた実践を、見つめ直すきっかけになった。ここまではできたという、現在地が今回分かったので、できたことから今後ステップアップしていきたい。

T: 先日、M先生の道徳と算数など授業を見せていただいたが、教室空間がよいと感じた。子どもたちが自然と助け合う雰囲気ができていた。これは学級経営それとも、道徳の効果どちらの影響ですか。

M: 道徳科授業をよくしたいと思った時に、学級経営をよくしていこうという考え方になってくると感じている。

T: U先生はしっかりとした授業イメージをもっていると感じる。先生の授業イメージと子どものイメージがずれていると感じた時はどうしていますか。

U: まず問いをもつことを大切にしている。先生の願いも語るけど、子どもの願いもすり合わせるようにしている。子どもの問いと教師の問いのつながりや、思いのすり合わせが重要である、そこを意識している。

T: TY先生の以前見せていただいた授業で子どもたちが自分の好きなことをプレゼンする活動が、それぞれのスタイルで楽しそうにやっているのが印象的だった。一人一人が主役になっていた。このような活動をするために道徳の授業でも何かやっていることはあったのですか。

TY: 子どもの言っていることを受け止める、面白いと思える心を普段からつくっている、友達が言っていることに対してその友だちが本気で思っていると感じられるクラス作りが大切だと感じている。

T: TY先生は先ほど話題になったような、子どもたちが内容項目、自分で教材を選ぶような授業はやってみたいですか。

TY: そのような授業をやりたいと思います。

T: U先生はこれからどんな授業をやりたいですか。

U: 自分から何か価値をつくれるような授業をやりたい。例えば、自分の身の回りのことを内容項目と関連させて、感動した体験と結び付けてプレゼンするような授業をやりたい。

T：M先生はどのような授業をやってみたいですか。

M：やってみたい授業は先ほどの図工のような楽しさが伝染する授業。途中で変わっていくような授業。友だちに影響されずに、自分だったら、どうするか台詞を考えさせる劇などを授業やってみたい。

T：子どもたちが主体になると、学びを自分で選択をするようになっていく。もし子どもたちが主体になって自己決定していくようになってしまった時の教師の立ち位置をTY先生はどう感じていますか。

TY 何もないところから子どもが一人で考え始めることは難しいと思っている。例えば「よりよい集団生活」について考える時どれだけ自然に、子どもたちに「考えたい」と思わせるかというのがポイントだと感じている。このために他教科や領域、総合や学活等でも話し合う場面を設ける、その中でもとりわけ「心」に関する場面は道徳科の授業で考え合えるようにしていきたい。いかに普段の生活をいかに道徳につなげるかということだと感じる。

T：何となく嘘っぽくなってしまいう授業を嘘っぽくしない力教師の力量が試される。しかしこれから道徳科授業においていろんな授業の在り方がこの10年で生まれるのではないかと感じている。いろんなことを試行錯誤しながら、これが自分の授業なんだというものを若い先生方にはもってもらいたいと感じている。ありがとうございました。

#### (4)ご講演

講師 山田 貞二 先生 岐阜聖徳学園大学 教育学部准教授

テーマ：「道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～道徳科授業におけるICT活用の視点から～」

##### ○ICTと現在の学校教育

- ・GIGAスクール構想は2019年から始まり、コロナ禍によって一気に加速した。文房具としてのICTの使い方、ベストミックスについて考えていきたい

##### ○個別最適な学び協働的な学びとは

- ・トキワ荘（後の有名漫画家たちが、励まし合いながら作品を生み出した共同宿舎）

ここでは一緒に集まってみんなで何かを作品をつくった訳ではない。しかしみんなで話し合い、助け合いながら自分の道をきりひらいていった。この過程は「協働的な学び」に近いものがあると感じている

##### ○静かなる大多数（サイレントマジョリティー）

- ・道徳科ではこれを壊していかないといけない
- ・自分がどのように生きていくかを考えていかないといけない

##### ○これまでの授業

- ・これが正義だ、これが正しい、答えが一つのもの
- ・学習指導要領の実施（これまでの先人たちが研究してきた教育実践）とICTベストのミックスを考えていく  
答えがある問いを先生が提示していたが、これからは子どもたちが答えを見つけていく

##### ○「追究」の社会科有田先生

- ・子どもたちが授業の中で問いを生み出し、机上の複数の資料集を活用して、問題を解決する姿が見られた
- ・今は、辞書の代わりにタブレットという素晴らしい教具がある

##### ○ベストミックスとは

協働編集（ジャムボード）の使い方は？

全員挙手からの発言スタイルは？

新旧の授業形態の新しいスタイルのベストミックスを参会者で考えてみる



- ・机の並び方配置一つでも子どもが決めることで授業が変わってくる
- ・必ずしも手をあげなくてもよいのではないかと「ロイロノートなどのICT」による交流もよいのではないかと
- ・ジャムボードで色を分けたり分類したりする事で話し合いの質がより高まっていくのではないかと  
この感覚がベストミックス



○紙ベースとICTベース

- ・4人でそれぞれ自分の画面を見てしまう
- ・模造紙だと、顔を突き合わせる。これは大切な要素。
- ・話し合いの場面にディスプレイを一つおくだけでも、全員が同じものを見る活動が生まれる
- ・アナログでミニホワイトボードに書いていってもよいのではないか

○意見が言えない子

- ・言いたいときチャットを使う。瞬時に感じたことを、打ち込んでその質問を拾っていくこともできそうである
- ・考えの集約もパソコンを使うことで一斉の確認も可能である

○指導の個別化と学習の個性化について

- ・道徳で考える「生き方」は参考資料がない
- ・他教科とはと違う、対話でしかなかかなか答えが見つからない
- ・道徳でも探究的な学びが必要

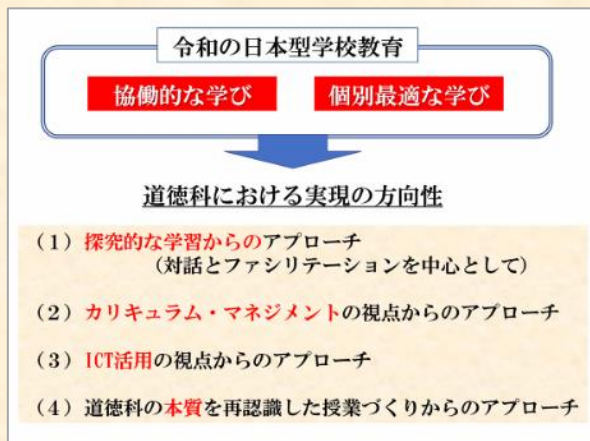
○道徳科における「探究」の違和感

- ・「きわめるもの（探究）」というより「常に求めて」いくという「探求」のイメージの方がしっくりくるように感じる

○ICTのいい所

- ・意見が拡散し、共有していける良さがある、深めていくというより
- ・ゲストの話聞く体験をしたり、教室の中だけでの学びを飛び出すことができる

○実現させるための4つの提案



① 探究的な学習からのアプローチとは

○センスオブワンダー「沈黙の春」レイチェル・カーソン（1962年）より

“「知る」ことは「感じる」ことの  
半分も重要ではないのです”

“子どもの目を見張る好奇心  
目に見えないものを想像し、感じとる力は、  
心ある大人の手助けによって芽生えていくもの”

“大事なものは真実を見失わないこと”

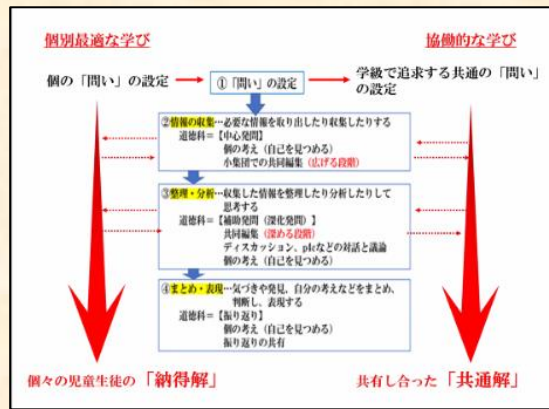
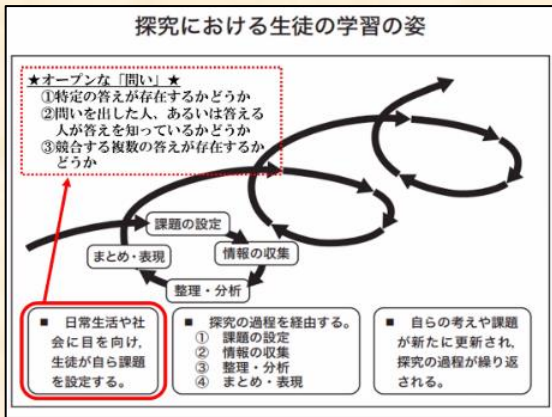
“感謝の気持ちから喜びが生まれる”

『沈黙の春』レイチェル・カーソン（1962年）より

教材と出会った時に、子どもが出会ったこと、疑問であったり不満であったり、こういうことを感じ取る心、教材との出会いから、いろんなことを考えるのではないか。

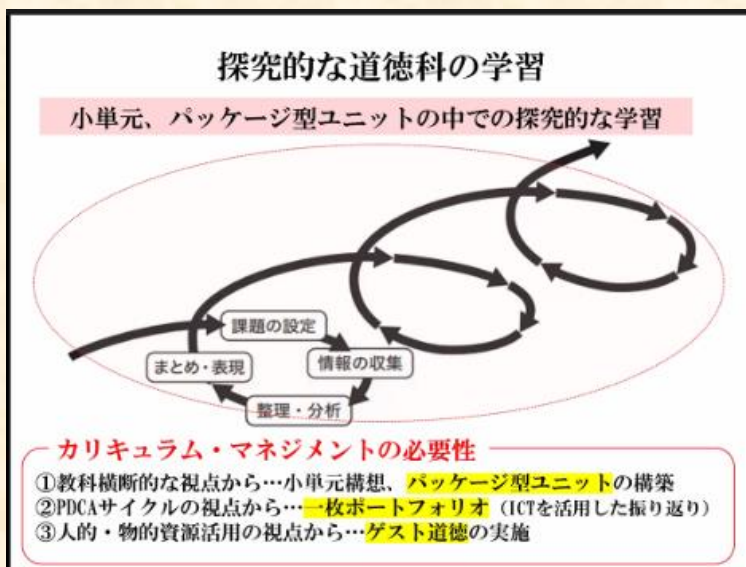
○探究のスパイラスを道徳に組み込むために

- ・連続して問いを繋いでいる
- ・パッケージや小単元を組むことでやっていけるのではない
- ・学期に一回くらい小単元の授業を行って試してみよう
- ・事前読みをしているオープンな問いをつくってみよう
- ・はじめの感想をテキストマイニングで分類して子どもがテーマをつくることもできる
- ・みんなで話し合った結果「個の問い」は単元の最後に出てくるとよいと感じている



(2)カリキュラムマネジメントの必要性

- ・学活や総合などは道徳の単元計画に比較的関連させやすい



○命のパッケージユニット

- ・七週にわたって命について考える場面を継続して与え続ける
- ・学習のまとめとして一枚ポートフォリオを活用することで、自分の変容に気づけるようにする

愛知県一宮市立茂井中学校の事例  
 2学期のテーマ「命」と向き合う  
 ～がん教育を中心とした取組～

第1時 保健体育  
 「がん」についての基礎知識

第2時 道徳…家族愛  
 『天使の舞い降りた朝』（あかつき）  
 （母親が乳がんのミュージシャンの教材）

第3時 道徳…生命尊重  
 『ケイコちゃんとマイさん』（NPO）  
 ・いのちをバトンタッチする会  
 ・全学級で同時に公開授業（保護者、地域）  
 ・ゲストティーチャーに教材の作者  
 ・校内研修で模倣授業

第4時 学級活動…ピアサポート基礎講座

ピアサポートの基礎を学ぶ授業

第5時 総合的な学習の時間  
 ・小冊子に登場するケイコちゃんとマイさんが出演する映画会  
 ・ゲストティーチャーに監督とケイコちゃんの父親  
 ・鑑賞後にミニ全校道徳

第6時 学年道徳（3年）…映画出演者を招いて

第7時 ゲスト道徳…移植体験者を招いて 教材＝ドナーカード

### ◆一枚ポートフォリオ評価（OPP）

道徳科「学びの振り返り」シート

学習前の考えや思い 学習後の考えや思い

学習前と後の自分の考えや思いを読み比べて自分の成長を考えさせる

学年テーマ 学年で決定

保護者の思い

教師の願い

(3)ICT活用の視点からのアプローチ

- ・目的ではなく手段として、文房具のように使う
- ・端末に問いを打ち込む、分類するなど活動の中に自然に使うことができる

○ICTの活用の注意すべきシーン1~5

・例えば画面が見えにくい場合は手元の端末見させればいい。電子黒板を使うことありきになってはいけない。(シーン1)

○今までの形骸化された授業からの脱却(シーン2~4の例)

**【シーン2】**  
教科書会社の指導書に掲載されている指導案通りに授業を進め、ただ単に子どもたちに発言させているだけで、深まりのない授業。

**【シーン3】**  
一斉授業型の授業が復権し、話し合いの活動が減少し、先生との一問一答式の授業が淡々と進んでいき、先生がまとめる授業。

**【シーン4】**  
ICT端末を積極的に活用しているが、対話が少なく、キーボードを打つ音のみが“カチャカチャ”としている授業。

子どもたちが端末に考えを打ち込む…“カチャカチャ”

↓

先生が一人一人の考えを把握する…無言

子どもたちが、他の意見を聴く…無言

↓

先生が気になる意見の子を指名して発言させる(数名)

子どもたちは、ずっと両面を見ている…無言

↓

再び、先生の問いに対して考えを打ち込む…“カチャカチャ”

**【シーン5】**ソフトな押し付け道德感動的な動画教材やスライド資料をICT端末で見せる先生。視聴後に、「感動したことを打ち込みなさい」と先生。「ここがいいよな!」「こういう生き方をしたいな!」「いい話だろ」等と先生の価値づけが続く…。

○ICTを上手に授業に取り入れている学校の実態

- ・自分の中で感じたことについて ICT を活用しキーワードで打ち込んでいる。その中で自己を見つめる時間を設ける
- ・ICTを活用しキーワードについて調べる。友だちの意見を参考にする
- ・その途中、「友だちとの対話」などアナログな活動を入れる

○有効的な活用を図るために

- ・P4C的手法を取り入れる場合、35人だとなかなか発言することが難しい
- ・二重円の椅子の配置にし、中心で話す子どもたちに対して周りがチャットで入力をしていくような授業形態も考えられる
- ・アイデアと工夫次第でICTのベストミックスは色々な可能性が考えられそうである

**効果的な共同編集のためのルール**

- ① 自分の考えを打ち込む時間を確保する  
(黙働の時間、自己を見つめる時間)
- ② ファシリテーターを置く
- ③ 対話や議論しながら、意見を分類や整理、関連付け等をする  
(対話や議論の時間、他者理解の時間)
- ④ 自分の考えをまとめる(自己を見つめる時間)
- ⑤ 個で意見交流(班単位の発表は避ける)

ご清聴ありがとうございました

**オンラインフォーラム総括**

○4年ぶりの対面開催でしたが、先生方の活発な質疑、対話で、学びの多い充実したフォーラムとなりました。昨年度の研究テーマを引き継ぎながら、今年度、児童自ら学びをつくっていきけるような授業の可能性を模索していきたいと思ひます。今年度も様々な学習会で、先生方と学び合えることを楽しみにしております。たくさんのご参加本当にありがとうございました。